

保育といふこと（ノートの中から）

平安女學院保育科 大塚 喜 一

幼稚園の保育に於て主力を注ぐべき要點は、幼兒の自然なる具體生活を保ち育てることであつて、こゝに教育と云はずに特に保育といつた意味があると思ふ。幼兒の「あそび」なるものは、知情意未分の具體生活即ち一つにまとまつた「體」を具へた全き生活であつて、この生活を爲すことにより、幼兒の心が圓滿にどちらにも偏らずに成育してゆくことが出来るのである。従て保育の「保つ」とは、未分の未しきものを分化以前の渾然たる状態に於て保つといふ事である。既に分化したものは、其程度の發達段階を終へたものであつて、決定されたる即ち教育的價值より云へば可能

性が現實となつて現はれたものである。そうした一段の發達を卒へた後の教育即ち小學校上級及それ以後の教育と、その段階にまだ達しない前の幼稚園の保育とは、明に色彩を異にすべきものである。即ち形がまだ定らない飴のやうな流れやすい粘土のやうな可塑性に富んだ状態から、知情意の心の働きやいろ／＼の性格に漸次に形成されんとする途中にあるのが丁度幼稚園時代なのであるから、此の途中の状態に於ける独自の特色ある心の働きを十分にさせておくことは、やがて分化し發達した小學校時代に至つて、無限に豊富な内容をその中から開發せしめ得るものとを育てゝゐるので

あつて、こゝに保育獨持の使命の尊さがあるのである。にも拘らず、それを人爲的に早く成長させようとするのは、折角豊富な内容を後年に産み出すべき寶庫の製産（醸造）能力を興へられてゐる幼児期を強ひて短縮しやうとする人間の淺はかなは、からひであつて、自然に反するは勿論、實に惜むべき限りである。吾人保育の任に當る者は、斯うした特色をよく理解し味得して幼児の天性を尊重して保育すべきである。

將來成長すべき性格のもとを育てるといふ意味で、幼稚園の保育は人生の基本教育であるといふ事が出来る。今迄述べて來た要點を、教育目標に移して考ふれば、幼稚園の保育は、將來の圓滿なる人格の基本的陶冶を目標とすべきものである。といふ事になる。基本的とは、いろ／＼の性格が大人の生活に於けるが如き状態にて（例へば一々

の徳目として）養はれるのではなくして、そうしたいろ／＼の性格が出て來るものと（素地又は根源が養はれ培はれてゐるといふ意味である。従て、一々の性格又は徳目の教育が部分的であり分化的であるに反し、性情の保育は全體的であり具體的である。故に、保育の良否或は自然不自然は、後年の性格の全體に影響する。

幼稚園時代は幼児のいろ／＼な氣質の持徴が浮き出し初むる時期であつて、夫々の長所を伸し短所を矯める事は性情教育（殊に情緒の保育）の重大なる任務であるが、こうした努力は各個性を既製の大人の性格に早く固めてしまふのではなくして、以上述ぶるが如き幼兒本來の具體生活を全うせしむる事に向けらるべきであると考ふれば、此處に述ぶる所と附合すると思ふ。生々潑潑たる幼兒の心の琴線に觸れてそれが如何に爲さるべきかは本文を記す事に當つて吾人の最も頭を悩ました

所であつて、此點は眞摯なる保姆諸彦の教を乞ひたいと思ふ。

此方面の思索と體驗との知行合一的精進は、實に最も力を注ぐべき保育の重心點であつて、血あり涙ある多年の精勵により保育界に貢獻せられつゝある先輩諸賢を初め、幼兒の友となつて純眞なる處女の母性愛に生くる幾多の若き同志の方々が此の保育本來の使命に向つてその生々しき體驗と感激とを披瀝せられ、一般保育界に清新の滋味を與へらるゝと共に、我等學究の徒にも貴重なる資料を提供せられむことを切望する者である。

今迄述べて來た所を實際に當てはめて云へば、幼稚園の保育に於て最も大切な事は、幼兒達の力一ばいに面白く遊ばせるといふ事になる。凡そ幼兒は一般に、自分の好きな遊びをする時には、我を忘れて餘念なくあの小さい身體からあふれ出るあ

りつたけのエネルギーを全部當面の生活にぶち込んでゐる。かう書いて來た筆者の眼前には去年の初夏の頃、東京の成城幼稚園での或る日の光景が展開されて來た。砂場で遊んでゐる一團の幼兒達、山を造る者、池を掘る者、トンネルをうがつ者、水を運ぶ者。小さい手のとどく限りの深い穴を堀つてゐるので、おかつばさんの髪の毛が垂れて砂がついてゐるのにも氣付いてゐないらしい。小さいバケツに一ばいに水を入れて重さうに持つて來る。水が少しぼれて足にかゝつた事位に頓著せず、友の作つた池の中へ流し込むや又嬉々として噴水の方へ水汲みに走る。お歸りの時間になつたので、僕は保育室で幼兒の人数だけのオヤツをお皿に入れたが一人も入つて來ない。がかうしたみつしりした遊びの時が五分——七分と經つた。オヤツですよと窓から呼んだが、丁度其時窓の下をかけてゐた元氣な男兒が「もう少し待つ

て」と答へただけで、他の兒童は僕の呼聲がきこえなかつたのだらうと思はれ、位遊び、そのものに全精力を傾注してゐる。彼等は各自自己の當面の生活に没頭しつゝ、しかも其間に働く或る相互作用たつによつて遊びの面白さ（熱と力）が充實し進展してゆくものゝやうに思はれる。此の相互生活たるや、小學上級生の如く意識的計畫的でなく、むしろ自然の環境の中に成立し圓熟して來た半意識的な色合を多分に持つてゐるだけ、純真な生一本な幼兒の生活としての尊さがある。僕はこうした情景に一種の畏敬の念をさへ起さずには居られなかつた。幼兒たちは決して自分勝手な事をしてゐるのではない。彼等はむしろ彼等の背後に動いてゐる或る目に見えざる大なるものゝ命のまゝに忠實に致々營々として活動してゐるのであつて、彼等の眞劍なる態度——頬の色、眼の輝きはこの大なるもの、の如實の顯現である。フレイベルの發見せ

し「神性」も亦實に是に違ひはない。

斯かる熱心な遊びは、其深淺の差こそあれ、幼稚園の生活の本體ともいふべきのであつて、幼兒の朝の登園の際の新鮮にして潑刺たる心の動きを捉へて、彼等と共に生き共感し共鳴しつゝ、その自然の心理に副ふて（知らず識らずの裡に）こうした眞劍な生活態度に迄導き入れて來る所に保姆の最も大切なる働きがあり、そこに殊更に教へるのでもなければ單なる放任でもない幼稚園の保育の積極的價値が發揮される譯である。

談話・遊嬉・唱歌・手技・觀察等の各保育事項は、何れも幼兒の生活の自發的な具體的な相互的な「本義」を益々發揮せしむる事を主眼としなければならぬ。例へば、お話のリズムや表現の反復や音聲の感情的表現や動物の擬聲等が幼兒の心理の法則を守る話者の眞摯な態度によつて演出せられ

る時、是等の諸効果は相俟つて幼児の魂に天來の妙音を傳へ恍惚として聞き入るのである。筋肉運動の内的感覺に律動的快味を體驗せんとして幼兒はスキップ、ダンス其他の遊嬉をなすのであるから、遊嬉の選擇指導觀賞等に際しては、この要點に着眼し其遊嬉が如何に幼兒の生活の進展に役立つてゐるかと思ふべきであり、決して感覺的な外形美に眩惑して不自然な練習を強ひてはならぬ。

心の中にあふるゝ情緒の發表手段として幼兒は唱歌を歌ふ、實に原始藝術に於て詩は散文に畫は文字に先だちて發生せしものである。厚紙製の飛行機、粘土にて造れる自働車、木工細工の建築等の單純素朴なる作品は幼兒獨特の現像を活躍せしめ理想と現實との融合せる假象の世界に彼等を遊ばしめ、かくして彼等の生活を進展せしむる好適の資料となる。路傍の一木一草も幼兒の觀察の對象となれば冷かなる理科學的解剖の臺に載せられず

して温かなる情意の零圍氣に包まれ、其生活の圈内に參加せしめられる。斯の如くにして、保育事項の自然にして潤澤なる導入により最初は斷片的であり我儘倦怠等の不純分子を混入してゐた遊びも次第に充實した面白いものとなり、更に圓熟せる具體的に相互生活の中からは、新しいいろ／＼の保育事項が期せずして産み出さるゝに至るであらう。(昭和五年末記)

